
真夜中に……

日向 夕陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真夜中に……

【Nコード】

N8927M

【作者名】

日向 夕陽

【あらすじ】

俺が中学生の時に祖父の家に泊まりに行った時の話。

姉と二人で留守番することになり、夜中に目を覚ましてしまった俺。そこで見たものは……

中学二年の夏。

俺は、祖父の家に泊まりに行くことになった。

祖父の家には毎年、当たり前のように泊まりに行ったが、その年だけは今でも忘れることができない。

「それじゃあ、留守番よろしくなあ。」

「わかった。気をつけてね。」

祖父は病院に泊まりがけで検査しに行くことになり、今日だけ姉と俺の二人だけで祖父の家に泊まることになった。ちなみに両親はデートだそうだ。

「お〜い。」

先ほど祖父を見送った玄関から声がした。忘れ物でもしたのか、戻ってきた様だ。

「どうしたのおじいちゃん。」

祖父は特に慌てた様子もなく、「こちらに歩いてきた。そして、俺の両肩に手を置き、じっーと目が合った。

「結城^{ゆじき}、夜中に目え覚めても寝たふりしろよ。」

祖父は一息ついてから顔をしかめて、静かに呟いた。その時の俺は意味が分からず、頭にクエスチョンマークをつけていた。そして何分か祖父に睨まれる形で向かい合っていた。

「え、うん。」

その内、ぎこちないが、俺が返事をするとう祖父は満足そうにニコリとし行ってしまった。

「結城、何してるんー。」

リビングからは姉の間抜けな声が聞こえてきた。たぶん、テレビでも見ながらヨガでもしているんだろう。

*

その夜、変な音で俺は目が覚めた。真っ暗闇のハズの部屋だが、ギリギリ部屋の中が把握できるぐらいの明るさはあった。

ペタペタ……

聞こえてきたのは廊下を誰かが歩く足音。祖父の家は大きく古い木造の家だ。もちろん廊下も木でできている。

姉さんかな。

最初はそう思っていた。トイレか何かだろうと。しかし、足音は止む気配がない、しかも段々とこちらに近づいてきている。

なんだか変だった。普通に歩いているとミシツミシツという音がするのだが、この足音はペタペタと、まるで水に濡れた状態で歩いているかの様だ。

そして、足音が近づくにつれて、障子の向こうから青白い光が見えた。

「ヒッ。」

青白い光が障子に作りだしていたのは、髪はしわしわで背は丸く包丁を片手に持った老婆のシルエットだった。思わず小さい悲鳴を出していた。

そこで、あの祖父の言葉を思い出す、「結城、夜中に目え覚めても寝たふりしろよ。」

あれはこういうことだったんだろう。

老婆は先ほどの悲鳴に気付いていないのか、そのまま歩き続けていた。俺は布団に包まりながら、障子から老婆が消えるのを待っていた。

早く消える早く消える早く消える。と。

あと一歩で障子から出ていくというところで、急に老婆は立ち止まる。俺の心臓はバクバクと爆発しそうな勢いで動き出す、全身からは嫌な汗が吹き出る。

その時、老婆がこちらを向いた。障子にできたシルエツトなので、もしかしたら逆に向いたのかもしれないが、本能的にわかった。

俺は瞬きも出来ず、布団の中から老婆を見ていた。というよりは、そこに吸い寄せられているかの様に目が離せなかった。

老婆は動く気配も無く、そのまま中の気配を伺う様に突っ立ていた。

永遠の様な数秒間、いや、数分間、障子越しに睨み合っていたが、その内俺は寝ていた。

*

次の日、ぐっすりと爆睡していた俺はぼんやりと目が覚めた。少しの間布団の中でゴロゴロとしていた。

ペタ……

廊下から聞こえた音に考える前に体が反応した。それと同時に昨日のことを思い出した。

「おはよ。」

障子を開けて出てきたのは包丁を持った老婆ではなく、姉だった。なんとも呑気な声だった。

姉を見て安心した俺は昨日の出来ごとを聞いてみたが、姉はずっと寝ていた様で知らないらしい。それでも、気味が悪いのでバット

片手に二人で家中探した。押し入れから屋根裏まで徹底的に。が、誰もいなかった。

安心したが気味悪い。やっぱり昨日の老婆はこの世の人じゃないらしい。

少しだけ気まずい雰囲気になったが、祖父が帰ってくるまで姉と一緒にテレビを見て過ごした。

数時間後、祖父が帰ってきた。俺はやっとこの家から出れると安堵した。玄関まで姉と一緒に祖父を迎えに行った。

なんだか様子が変わった。祖父はなんだか慌てている様で、靴を適当に脱ぐと俺と姉の手を握った。祖父の口から出てきた言葉に俺は驚愕した。

なぜなら、どこかでデートしていたハズの両親が死んだのだ。

とある海岸で、車の中にいたところを殺されていた。包丁で心臓を一刺し、即死だったらしい。

そして思い出す昨日の老婆。

「そついえばおじいちゃん。昨日のアレ何。」

昨日、祖父は明らかに知っている様な言動をしていたが、覚えがないらしい。嘘をついている訳でもなければ隠している訳でもない。知らないらしいし、言った覚えがないらしい。

俺はぞっとした。

*

あれから何年か経ったが、俺はあの家に住んでいる。もちろん、夜は途中で目が覚めないようにしている。が、正直寝るのが怖い。

今からちょっと前に姉が死んだ。殺された。

寝室で、包丁で刺されたらしい。犯人は見つかっていない。たぶん見つけられないだろう。

(後書き)

もちろんフィクション

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8927m/>

真夜中に.....

2010年12月31日18時40分発行